

蓬茨祖運述

『教行信証』の基礎講座

東本願寺

目次

真実の教

第一章

真宗を学ぶ／3

真宗とは何か／6

内を見る／10

釈尊の教え／16

偽と仮と真／20

第二章

仏と衆生／27

仏陀の名／32

大無量寿経／38

仏の説法／41

第三章

わが身のうえに／48

真宗の教相／51

二種の回向／55

大経の大意／62

第四章

自力ということ／68

如来の本願／72

仏を念ずる／76

如来と私／79

教と行／82

真実の行

第一章

真実とは／89

往相回向／94

行ということ／101

聖道の行／106

第二章

諸仏の教え／110

ほとけの名／112

五十三仏の伝統と法蔵菩薩／120

諸仏

称名の願／126

第三章

大悲のこころ／129

因果の道理／133

行の問題／139

六字釈／147

第四章

言南無者／158

帰命／166

安心／168

真実の信

第一章

行を信じる／177

合理・不合理・信心／181

正しい信仰／186

自身の生活

の中に／191

往生浄土の因／194

第二章

自分の願望を知る／199

名義相応／203

空想・理想・本願／207

信じると

いうこと／212

第三章

本願結実の時／216

浄土門と聖道門／221

仏の名号をたもつ／228

まこと

の世界人／231

故郷への道標／238

第四章

浄土宗の独立とその基礎づけ／241

三一問答／246

悪人正機／252

願文の

声／256

本願招喚の勅命／261

自己の稟受／264

本願成就の信心1―回

向―／269

本願成就の信心2―回心―／273

真実の証

第一章

「真実証」の意味／281

正定聚と滅度／284

如来回向の証／287

凡夫が仏

になる―往生浄土の道―/290

報土と化土/292

往生と転生の区別/296

第二章

真実の利他/301

分水嶺/303

真の仏弟子・仮の仏弟子・偽の仏弟子/305

理想としての無上涅槃(自力)と事実としての無上涅槃(他力)/309

還相回

向―その根源としての弥陀の浄土―/313

還相回向―その現実における利益としての

衆生の本願―/317

第三章

浄土門建立の意義/323

十方衆生を僧伽とするもの/327

光・寿無量の本

願/331 化身土―仏の教化の歴史―わが身の歴史―/336

転入/339

邪偽の

批判―懺悔―讚嘆―/342

真実の教

第一章

真宗を学ぶ

仏教というものを学ぶについて、いろいろ学ばねばならぬことがあります。まず真宗ということについてですが、真宗といえ、それは仏教のなかの一派と一般に考えられております。そこでいろいろと問題がおこるわけです。

その問題の一つは、相互に混乱するということとです。それで真宗ということについては、一般に真宗と世間でいわれるものと、真宗という名前の意味とを区別しておかねばなりません。

一般に真宗といわれているのは、わが国における仏教教団として存在しているものなかの一つの名前であり、それは親鸞聖人を宗祖として伝えられた教団の名前の

であり、その教団のもっている教義の名前が、常識のうえでは真宗といわれております。その意味からいうと、真宗というものは非常に小さなもの名前になるわけです。そうすれば、真宗というものは、今日の社会や人間とは直接の関係をもたないものになり、われわれ今日の時代に生きている人間としては、たんに慣習として関係をもっているという以外になくなるのです。だから、その意味からいえば、真宗というものは今日の時代にはほとんど魅力が感じられないのであります。そうすれば、いまわれわれは直接に今日のわれわれと結びついてこないものを、たんに生活環境の慣習のうえから学ぶことになってしまいます。こうしてわれわれは真宗というものを学ぶについて、はたしてどういう価値があるのか、またその価値がはたして今日の社会に通用するかどうか、もし通用しないとすれば、なぜそのようなものを学ぶのかと、いろいろ疑問がでてくるのであります。

今日までのところ、ややもすれば仏教とか真宗とかを学んでも、学んだことがわれわれの社会に通用せぬきらいがあります。つまり、学んだことが身につかないということです。なにか寺院に関係した特殊な立場から、僧侶の資格として学ばねばならないというようなことになっております。このように教団の機構のために要求されて学ばざるをえないという伝統があるわけですが、そのためにせっかく学んだことと、われわれの生活とがべつべつになってしまうとすれば、それはまことに惜しいこととあります。仏教とか真宗とかということについて、今日までいろいろ研究されてきましたが、ほんとうはその千分の一もわかっていないのが真相であります。仏教や真宗を研究した研究書はたくさんあるが、その真相はあきらかになったとはいわれないのであります。

しかし、だから研究はすべて無駄だということではありませんが、仏教とか真宗とかが、われわれの実際の生活にどんな意味をもって働いているのか、はたして力になるかならないか、といえは、力になるとはいえなくなっております。

そういうわけで、仏教についての予備知識のない状態のほうが、仏教を自分のうえに知る良い機会にあるということも言えるのではないかとおもいます。

真宗とは何か

まず真宗を学ぶのは何のためかといえ、一つには、われわれの二度とない人生において、いつでもそれにもとづいて行動ができるということ。さらにもう一つは、生きてゆくということには、どんな意義があるかを知ること——この二つの意味をもとにして、真宗とは何かということをつねるわけです。二つの意味といっても、これは一つのものであります。われわれが人生を生きていくについて、生きるということだけでも大問題であり、しかも生きることについて、どんな意義があつて生きているのか、何のために生きねばならぬのかということを考えねばなりません。しかし、それを考えてみる暇のないほど、生きるということには、いろいろなことが要求されます。つまり、そこには衣食住の問題から、自分と他人とが関係する社会問題など、生きるというだけでも容易なことではありません。今日、人間に生まれた

ものは、そうしたことに疲れはてねばなりません。そのうえ、生きるのは何のためかと考えることは、容易なことではないのです。しかし、その意味が問われることがないなら、一生けんめいに生きること努力しても、何のためかもわからず、ときによればゆきづまりもでてくるのであります。つまり、生活にゆきづまってしまいます。

ここに、さきに述べたわれわれの生存の意義、人間に生まれた意義というものを、自己に向かって問うると、問うことができぬのでは、たいへんな違いがでてきます。問う方は、ゆきづまりが大きな扉となるのです。扉は次の部屋への通路となります。ゆきづまりは、もうどうにもできないが、そこにひるがえって、なぜと問うならば、自分のまえにふさがっていたものは、自分をふさいでいたものでなく、自分を次の部屋に通すものとなります。そこで、われわれの人生の意義もたんに頭で考えるだけでなく、考えられるままが、われわれの生きている内容となつてあたえられることとなります。

そういうところで、真宗とは何かということがあきらかにされるのであります。仏教とか真宗とかという学問は、他の学問とちがつて、仏教とは何か、真宗とは何であ

るかとはわかることが、やがて人生の目的があきらかになる学問であります。そして、仏教とは何か、真宗とは何かということがわかったときには、その人は大きくかわることになります。つまり、わが身が問題となり、わが身に新しい意義が見いだされてくるわけです。

ところで、仏教と真宗と名前が二つあるが、実は真宗というものが仏教であります。世間では仏教と真宗とを二つ並べて考え、仏教のなかに真宗があり、天台・真言・禪宗があると考えております。こういう考えをもとにして真宗なり仏教なりをみるならば、われわれの人生とは直接に関係のないものになってしまふのであります。われわれは世間からは真宗の僧侶であるといわれている。そういうのがこの世のならわしだから、そういつていますが、しかし人間として、真宗の僧侶だといわねばならないのはどういふわけがあるのだろうか。なぜ特に真宗の僧侶といわれるのかといえ、真宗の寺院の主となることによって、そういわれるのです。しかし、その意味でいわれるのであれば、農家に生まれたら農家、商家に生まれたら商人といわれるのと区別がなくなるわけです。

農家に生まれたら一生農業をしなければならない、寺院に生まれたら一生僧侶である、という過去の社会の機構が現在でも残っており、その機構のうえで名づけられております。そして、農家が農家として生きていくには農業の技術を学ぶのと同じように、僧侶も僧侶の技術を学ぶということになっております。そうすれば、僧侶が学ぶものは農家にとつては何の関係もないものになります。農は農、僧は僧の技術を学ぶことになり、われわれが学ぶ真宗の教えは、すべての人に関係をもったものとはいえないくなるのであります。

しかも、農業は今日でも少なくとも産業の一つとして社会を生かしているが、真宗の僧侶は社会とどんな関係をもっているかといえ、それはまったく漠然とした力のないものになっているのであります。いわば、かんじし神主とあまりかわらぬことになっており、結局は葬式とか先祖供養の儀式をつとめることになっていいます。そして、そのほかに、真宗という立場にはないところの現世利益というものが要求されるのであります。

真宗は過去の教団の機構が、他の教団よりもすぐれていたので、葬式や法要という

儀式のほかに説教の法座を開いてきたのであるが、いつかその説教も儀式化して、説教を聞いて悩みを解決するというよりも、感情的に満足するという状態になってきたわけです。こういうわけで、真宗というものがわれわれと無関係になり、また寺院というものが暗く感じられるのであります。このことはどうしたらよいか。問題は、真宗というものが仏教のなかのいろいろな宗派の一つと考えられていることにあるのであります。

内を見る

仏教というものは、われわれ人間にとってなくてはならないものだというよりも、われわれ人間というものを本当に立てるところに、その本来の意味があります。人間に生まれ、ただ生存ということのみに過ごしていくわれわれに、人間を本当に自覚させるのが仏教であります。人間を自覚するということは、人間自身はつきりし

た目的を立てることです。そこに仏教が真宗であるという意味があります。

そこで、その真宗が親鸞まではどうなっていたかを簡単に述べることにします。

仏教を真宗といわれたのは親鸞がはじめてではなく、それ以前にも仏教は真宗といわれていたのであります。もともと外道げどうと内道ということがいわれ、仏教以外のあらゆるもの、つまり政治・経済・道徳などを外道といい、それに対して仏教は内道といえます。そういう意味で、外道に対して仏教を真宗というのであります。外道の「外」というのは、客観性ということですが、すべてのものを自分の外にみて、道を外部の世界に見いだそうとするのであります。それは自分の心までも自分の外にみて、その見いだそうとする心のほうは問わないのです。しかし、外道といわれるもののなかにも、心をしずめる道もあって、その意味では外部に道を見いだそうとするのとはちがうようにおもわれるものもありますが、しかし、その心自体がやがて対象化されるので、結局、外道となるのであります。

それに対して内なる道が仏教ということになります。それは外を否定するのではありません。外なるものは自己に無関係に存在するのではなく、自己と関係して存在し

ているところから、すべてを自己の内に見るのであります。それが、われわれ人間自

身をうち立てる方向であると、仏陀が見いだされたのであります。外なるものを内に見るといっても、実はそのことがすでに、外に見るよりほかないということがあって、内に見るのであるといいながら、それを外に見てきたのが、今日までの仏教学や真宗学の状態の一面なのであります。それで、内を見るところというのは、どのように見ることか。また釈尊がなぜそのようなことを教えられたのか、ということが問題になります。

ところで、釈尊は自分の生まれてきた環境を厭いとうて山林に入り修行をされたということが伝えられています。生まれたところは衣食住に不足のない王宮であります。そのなかから飛び出たのであります。それは、ただ王の子として生まれたということの問題だけではなく、人間として生まれたということを深く見つめられたからです。

人間は生まれたならば生きねばなりません。そして生きるということは年をとるといふことでもあります。年をとらねば生きることにはなりません。そうすると、年をとるために生きていようなものです。それで年をとらずに生きていたいという悩みもでてくるのです。それも順調に年をとればよいが、病氣ということがあります。この

世では一ぺんも病氣をしない人はほとんどありません。そして遂には死なねばなりません。このように生・老・病・死という苦しみを並べてみると、いやなことのようにだが、人間が楽しみとするのも、またこの生・老・病・死なのであります。はやく一人前になりたいとおもうときは、老も楽しみです。また病氣にも、治るといふ楽しみがあり、死というものにも、やはり終わったといふ楽しみがあるわけです。

釈尊は、ひとから幸福といわれるような身分に生まれた。衣食住に不足なものはないのですから、世間一般の考えからいえば、これ以上の幸福はないわけであり、しかし釈尊は、それには満足ができず、人間には生・老・病・死があるのでないか、それをまぬがれる道はないかと、無理な願いをおこされたのです。それで出家して、あらゆる宗教をたずねて歩かれたが、生・老・病・死をまぬがれる道はなく、ただ一時的にそのことを忘れるということが、あらゆる宗教の救いであつたのです。ただその忘れかたが、長いか短いかの違いが、それぞれの宗教にあつたわけです。われわれも、生・老・病・死をまぬがれ、幸福になりたいと求めることがあるが、それはゆきづまってしまう。釈尊もそうであつたが、そのときどうされたかといえ、

もはや求める道は外にはないゆえ、自分自身に求めるほかないと、木の下に座られたのであります。そして、もし自分自身の内に見つけることができなかつたならば身体が腐るまでこの座を立たないと決心され、そして内なる道を見いだされたのであります。そこに見いだされたのは、四諦しだつといわれますが、「諦」というのは、たんにあきらめるということではなく、自己を凝視するということであり、生・老・病・死は、たんに人間の個人的な問題ではありません。誰でもまぬがれることのできない人間の問題であり、人間の在り方でもあります。しかし、生・老・病・死は誰もまぬがれられないのだというだけでは、人間の問題から逃げていくことになり、まぬがれられないものをまぬがれようとするのが若さだとおもいます。まぬがれようとしなくなつた人が、まぬがれないなどといっても、何にもなりません。生・老・病・死ということは、社会生活の変化だということもできるでしょう。人間の在り方を徹底的に考えるとき、社会生活の変化はまぬがれようとしてもまぬがれないものです。つまり人間が社会生活をしているかぎり、そこでは自己喪失をまぬがれえませんが、そういう生・老・病・死を成り立たせている軸、つまり法をさとることができるならば、その変化をわれわれの働きとしていくことができます。

釈尊は生・老・病・死という問題をとおして四諦を見だし、そこに人間それ自体を成り立たせ、またあらゆる関係を自己の内になり立たせる法を見だし、自己即社会、社会即自己という自覚をあきらかにされたのであります。生・老・病・死というものに、われわれは悩まされているが、その悩みの体は妄想であり、そういう悩みの実体は存在しないものである。存在しないものを存在しているとおもつて悩みをおこしているのが人間である——という意味を釈尊が見いだされたのであります。その釈尊の見いだされた悟りの内容そのものは、普通の人間がえられる悟りであるということであらわすのが眞宗であります。釈尊という聖者が悟られたものが仏法であり、われわれのような凡人にはおよびもつかぬものとして伝わってきたのが仏教であります。ところが、そのつまらないわれわれ一人ひとりの開く悟りの道を開かれたのが釈尊であるという意味で、眞宗という名前を親鸞がもちいられたのであります。だから仏教と眞宗とは一応、そこに区別があるわけです。

親鸞以前も、眞宗ということは仏教という意味でつかわれていたが、その場合は、

外道に対して内道である仏教を真宗というわけでありませぬ。そうすれば真宗である仏教に対して、外道は偽宗ぎそうということになります。実体のないものを実体があるかのようにおもわせるのが外道だから、それは偽でありませぬ。外道によって支配されている今日の世間は、実体のないものを実体があるかのようにおもわせています。その意味で、真宗は仏教のなかの一宗派として伝わっているようだが、実はわれわれ一人ひとりのなかに、その道を見つめるところに、真宗の立場があるのです。

釈尊の教え

釈尊が見いだされた四諦というのは、われわれが自己や人生や社会をみる根本の立場であります。しかも、それはあらゆるものについて独立してみるところという立場です。われわれは自己をみるといっても独立してみるところとはできません。自分でみながら、それが自分でみたことにならないのです。映画など観るのに、新聞などの批評

をみてから観にいく人がありますが、どういふものをみる場合にも他人の意見をはなれてみるということはできません。現代はマスコミの時代といわれているほどですから、いよいよそうしたことをまぬがれることができません。そのことをたんに否定しても何にもならないのです。それを他人の意見として、自分の眼で見るといふことを常にたもつならば、そうした環境のなかで、われわれが正しく歩んでいける道が開けるのです。

釈尊は世間をたんに否定したのではありません。ないものがあるかのように誤ってみている虚妄こまごな世間を、虚妄である（むなし、みだりがましい）と知って、眞実の世界にわれわれが生きていく道をたずねられたのです。そして、その道をどのように人びとに知らせるかという工夫があつて、四諦という表現をされたのであります。四諦とは、苦諦・集諦じつたい・滅諦・道諦のことですが、まず苦諦とは、われわれのいま存在している世界を苦の世界であるとみつめる。どこにみつめるのかといへば、自己にみつめるのです。この世界は苦しい世界だとみているのではなく、世界というものに自己が苦しんでいるということに着眼するのです。われわれは、世間からいろいろな苦しみ

がやってきて、自分が苦しめられているとおもっています。そういう受け身の立場に立ってものをみるのは世間の立場であり、むしろそういう苦しみを集めてきているものが自己にあると、積極的な立場に立ってものをみてるのが次の集諦ということであります。

苦しみの集め主を見いだすなら、苦しみからまぬがれることができます。そうして苦しみの集め主を見いだして、苦しみからまぬがれることができるのを滅諦といいますが、滅というのは苦しみが消滅することですが、それはただ苦がなくなったということではありません。もし、そういうことであるなら、ふたたび苦がやってきたときには、また苦しまねばなりません。そこで、苦しみがなくなるといふことは、その苦しみを生かしていくことができるということなのです。もし、苦を生かしていくことができるならば、もはや苦しみを追いはらう必要はありません。そのようにどこまでも苦しみを生かしていく道が道諦といわれるのです。ここではじめて、苦しみをまぬがれようとしなくても、自然に苦しひはまぬがれることができます。あります。

この四諦が、初転法輪しよてんぽうりんといって、悟りを開かれた釈尊が初めてその悟りの内容を、

われわれにあきらかにされたものであります。仏教といえどもこれを学ぶほかにありません。人間に生まれてきたのが、すでに苦しみという以外にないから、苦をまぬがれるのには、その苦を生かしていく道を学ぶことです。もし、そうした道がないなら、われわれの人生がどのようなかたちで動いていっても、最後の結論は無意義に終わるのです。意義なくこの世を五十年・六十年と生きておらねばならぬのは、なかなかたいへんなことです。今日、そうした生存の意義が自己自身にあきらかにされていないので、その意義を物質的な幸福を求めることや、理想主義においているのであります。物質的な幸福を増していくこと、また社会的にはこの世界を改造していくことのほかに、人生の意義はないというようないことが考えられているのであります。また、人生には別に意義はないという生き方も生まれてきております。その日その日という生き方は昔からあったが、その気分が非常に強くなっています。だから、四諦の教えを身近にみつめると、現代社会がどういふ姿になっているか多少わかり、そのなかで自己自身に意義をもつことが仏教というものの立場であることが、わかってくるのであります。

偽と仮と真

親鸞が真宗といわれたことについて、一番大切なことは、自分というものが人生を生きていくについて、どのように意義を見いだしていくかということであります。仏教を信じないとか、また宗教には関心がないとかいって、理想主義に立ったり物質的な幸福を追求している人が多いのですが、それでもやはり、人生を生きるについての意義を求めているのであります。仏教には関心がないといっても、それは仏教を学ぶのは僧侶であると考える世間の立場から考えているのであって、無関心というのはいり関心をもっていることでもあります。また、無関心という意識すらもっていない人もあるが、それは仏教語が意識にのぼらぬだけであって、苦悩の毎日にとまがあらわけてはありません。

親鸞が真宗と名のられたのはどのような立場に立ってのことかといえ、従来の仏教という観念がわからない人、また仏教という言葉知らない人——そういう立場に立って仏教をあきらかにされたのであります。つまり、仏教を知っている立場からではありません。われわれが生まれてきたというときには、同時に環境というものが与えられています。気がついてみると、みんなが生きるために走っている。そこで自分だけ止まるわけにもいかず走りだした。生きるための競争にあけられて、自分をみつめるということなどは考える余裕もない。そういう立場に立って、仏教をあきらかにしたのが親鸞であります。

そういうことを簡単に言いあらわしてあるのが「義なきをもつて義とす^{註1}」という親鸞の言葉であります。どのような義も立てないで、そのままが救いである。われわれは、今から救われねばならぬというのではない。現在こうして走っているままが救いである。そうするとこのままで救われていることになるが、これが問題です。そのままという、これでよいのかということになるが、このことがいつも問題として残るのであります。このままでよいのなら、何もなくてもよいのか、それはありがたいことだといえそうだが、このままでよいといっても、わが身が満足できません。満足でき

ないというのは、このままではいけないことが、自分のうちにおこってくるからです。

「義なきをもつて義とす」という言葉は、われわれがああだこうだと思うことは、すべていらぬことだということです。もし、このままではよくなかったら、仏教とわれわれとはなにも関係のないものになるということなのです。仏教はわれわれにどう関係しているかといえ、生まれてきたままの姿でよろしいというところで関係してきます。そうでないなら、仏教はインドにおこった宗教であって、日本に生まれたわれわれとは深い関係はないものになるのです。そういうことだけでは、とりとめもないことになってしまいますので、そこに「念仏には義なきをもつて義とす」といわれているのであります。念仏ということは、文字のうえからいうと、仏陀を念ずるということであり、念仏というものは、人間に生まれ、人間の苦をみつめ、苦しみをそのまま現実の楽しみにひるがえされた方であり、その仏陀を心に思うのが、念仏ということであり、念仏という

ところが、日常の生活に追われている人は、人間の苦しみを超越された仏の心を思うということとはなかなかできないものです。そこで、そのように仏の心を思おうとしても思えないわれわれにとっては、念仏とは仏の名を称えるという意味になってくるのです。口に仏の名を称えることによって、念仏がわれわれに成立するのです。こうした平凡なところにたどりつかれたのが親鸞なのであります。親鸞は仏教について、偽の仏教、仮の仏教、真の仏教と三つにわけられています。世間において仏教というもの、客観的にながめられて伝えられるときには、かたちや名前は仏教であっても、その内容はインドや中国より伝わった呪術じゆじゆつなのであります。今日でもそういうものがもてはやされており、われわれは金銭・病気・恋愛・夫婦などの問題でゆきづまるとき、そうした呪術によって解決しようとしています。そういう呪術が仏教の行として伝えられているのが、偽の仏教といわれるわけであり、

そういうものと区別して、われわれのなかに仏道をみていこうとする仏教の理想主義、つまり内観の道をたどった人も少なくなかったが、それは特殊な人でないと求めることができなかつたわけです。それで、そういう内観の道をたどってきたのを仮の仏教といわれるのであります。それに対して真の仏教ということがいわれますが、ここに真というのは、仮に對し偽に對する言葉であります。浄土真宗のほかに仏教はな

いと、親鸞がいわれるのですが、歴史のうえで仏教と仮に名のっているものがいろいろあります。それらはすべて、真をあらわすために仮に存在している意味となるわけです。偽といわれるのは、仏教でないものを仏教と名のっているものことです。仏教なら内をあきらかにするのに、外に向かって物質的な幸福を追求しているのが偽の仏教（外道）なのであります。ここで注意しなければならないのは、他を仮とか偽とかいって批判しているだけではないということです。親鸞はわれわれ自身をあきらかにするために、仮とか偽とかいわれるのであります。

さて、真の仏教とは何かというとき、そこに仏の名号がでてくるのであります。名号というとき、それは称名とは別のことのように考えられるが、名号とはそのまま称名であります。称えるということは、たんに口を動かすという意味だけではありません。どこまでも、名号を称えることが称名なので、名号はそのまま称名なのであります。そこで親鸞は『教行信証』の教巻に、注2「まじりのまじり 仏教の体（ものがら・土台・本質）は名号である」ということをあきらかにしておられるのであります。われわれを成り立たせる道があるとするなら、自己自身をはなれて道はありません。しかし、われわれにはそれがみえ

ません。いろいろ他に道を求めていくが、われわれを離れて仏陀の悟られた世界はないということ単純にあらわすのが名号（称名）なのであります。だから、仏の名号がなければ、われわれは真実の法に出遇うことができないのであります。

ところでなぜ、親鸞はわれわれの救われる道は名を称することだといわれたのか。われわれを離れて仏陀の救いはない、われわれがそのまま仏陀の救いである——といわれても、それを聞いただけでは実際にはどんなことなのかわかりません。それで、名を称えるということと体からだとするといわれるのですが、名を称えるというのは、すでにわれわれのうえに仏陀の法が成就しているから、名を称えて救われるのです。このように、簡単な表現をとられたのは、もともと仏陀が名のられたということが最初にあるからです。仏陀というのは実は釈尊の口から生まれたのです。仏陀とは、正しい悟りを開いたというが、その正しい悟りの名が仏陀といわれるのです。あらゆるものにゆきわたる無上等正覚むじょうしょうかく、つまり、このうえもない平等の悟りを開いたと、釈尊がいわれたのです。苦悩をまぬがれる道を悟らねば、この座を立たぬと、木の下に座られた釈尊が、最初に仏陀になったといわれたわけです。もし釈尊が、私は悟りを開いた、